

# 202

2023. 2. 19

# 長崎郵趣

6. European route under UPU  
6.1. British ship

1888

## Foreign Mail to Germany



postal charge : 10 sen

NAGASAKI 4.30 — SHANGHAI(Japan) 5.2 = SHANGHAE(England) 5.3 — HONGKONG 5.8 — ALFELD 6.13

It went from Nagasaki on April 30, 1888, via Shanghai and Hong Kong, to Hannover. This cover was handed over to the British post office in Shanghai by the Japanese post office in Shanghai, carried to Suez by British ship and then arrived at Europe. By the postal charge revision on April 1, 1879, it became a postal charge called the mail of 12 sen which goes both via Hong Kong, and Brindisi, the mail of 10 sen which does not go via Brindisi and via Hong Kong, and via the United States. This cover corresponds to what does not go via Brindisi and via Hong Kong before long. The obliterator postmarks is medium size N type 8A.

わが人生の師天野安治先生  
伊藤純英



(下図)との交換であった。その時は、柳原友治さんから銘版切手を譲り受ける前で、風景切手は専門収集しておらず、OKしただった。実はこの銘版は平台2枚掛けという大珍品だったというのは、後日『日本切手専門カタログ』にこの銘版が図版として掲載されてから初めて知った事実だった。当時私の自室に入り浸り、日本切手の勉強をしていたN君によると「知識の差だね」。このN君は関西大学在学中からこの専門例会に参加し、卒業後は私と同じ出版業界に就職、私が帰郷後は、同じように地元の県庁に公務員として就職。私に出会ったばかりに人生の回り道をした男である。当時、ヨーロッパに旅行され、帰国後彼の地で入手した品を譲ってもらった。長崎外信ボタ消の旧小判10銭ドイツ宛(表紙)は今でも国際展作品で使用している。

大阪時代は、雑誌編集部に行った時のために自費で夜の「大阪編集教室」で勉強、営業の仕事が多い月には残業200時間。3年目に過労死寸前で県立島原温泉病院(現島原病院)に1か月入院療養。人生について考える。故郷での教員生活もいかなと考へ、その後、実は文学部に行きたかったので、マンション近くにあった関西大学天六校舎文学部2部の学士入学で3年次編入。2年間で卒業。うまい具合に中学と高校の社会と国語の4種類の教員免許が取得できた。というのも中央大学法学部時代に親から言われて教職課程を取っていたのだが、いやいや言われてのやる気がないので、教育原理という科目の単位を落とし、結果教育実習もできず、免許取得できていなかった。それが、関西大学文学部国文学科で幸いなことに教育原理の単位を取得し、その後の教育実習で社会の免許要件を満たし、社会の免許も取れたのだった。

5年目、本社編集部に戻れるという直前に退職。高校教師を目指すことになった。この選択にも天野先生の影響がある。幸運にも1回で採用され、帰郷。帰郷後一度、福岡に誘われ、フランス料理の食事をしな

がら長崎に支部を作りたい旨の相談をされた。平成に年号が変わった頃、当時の妻と2歳の長女の3人で、妻の姉夫婦が赴任中の名古屋まで10日ほどの車で旅行をしたことがあり、途中、尾道の天野先生の旧宅を訪問したことがあった。まだマンション住まいをされる前の自宅である。古民家といってもいい風格のあるたたずまいの家であった。この旅行ではN君の三重の住まいも訪ねた。

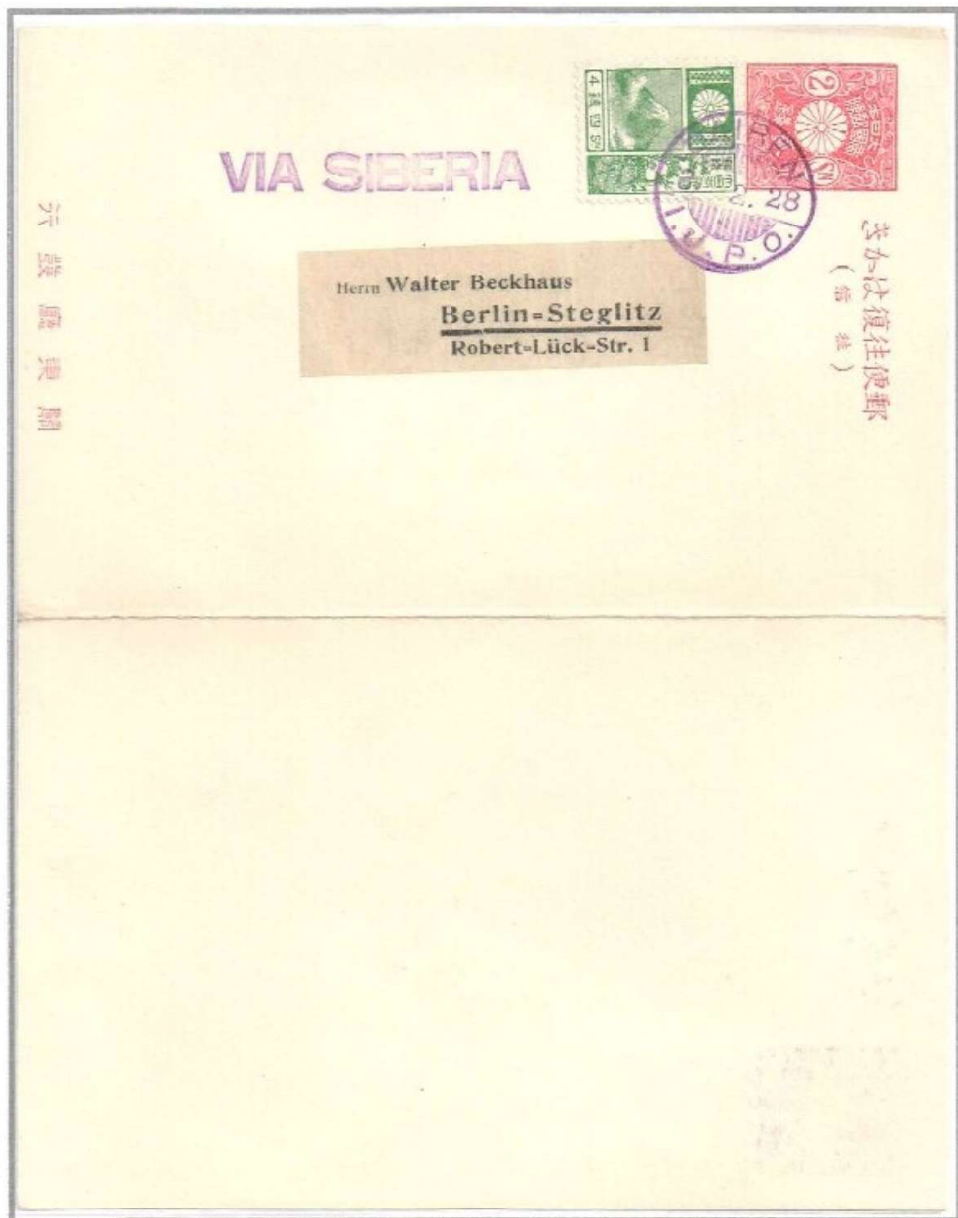
高校教師として採用後、佐世保、肥前大島、噴火災害下の島原、五島福江島と転勤時代が続く。この間、長崎郵趣会の海江田先生の後を受け、九州郵趣連盟の理事、のちに副理事長。噴火災害下の島原商業高校時代に財団法人日本郵趣協会の評議員1期。これは天野先生の推薦があったと聞く。この頃「九州郵趣家の集い」雲仙で毎年開催され、私が講演をすることになった年に天野先生が来られることになり、諫早駅まで迎えに行き、雲仙に登る手前の深江町の当時の妻の実家でコーヒー休憩した記憶がある。道中、島原半島北部は「扇状地が多いね」と社会科の教師らしい話。島原半島北部は肥沃な農業地帯なので、キリシタン一揆には無関係だったこと、戦後キリシタンは弱者で被害者という面ばかりが強調されるが、仏教寺院を破壊し尽くした加害者の面もある、ことなどを話した。事実、「東の高野山、西の温泉山(うんぜんさん)」といわれた修験道聖地雲仙は破壊しつくされ今は面影さえもない。

島の勤務を終え、上陸したのは2002年。これで長崎郵趣会にも毎月参加できることになった。天野先生から依頼されたものの、長らくできなかった長崎支部の結成も長崎郵趣会の池田さんと相談して、県内としては長崎郵趣会を名乗るが、対外的には財団法人日本郵趣協会長崎支部として発足することになったのは2006年5月。初代支部長には当時長崎遊学中の関さんをお願いした。天野先生が初代を務められた財団法人日本郵趣協会西日本地方本部も中

国・四国本部と九州・沖縄地方本部に別れ、九州・沖縄地方初代本部長は盟友田畑氏が務められた。その田畑本部長を迎え、支部結成式も行った。私はというと、財団法人日本郵趣協会最後の2期4年間を評議員として務め、その後2011年から約10年間公益財団法人日本郵趣協会九州・沖縄地本本部長を務めた。

天野先生との付き合いも40年以上になるが、毎年JAPEXや催事で話す機会があった。一番の思い出は、私が実行委員長を務めた島原での「全国郵趣大会inしまばら2018」。九州での開催は参加者が少ないので2年ぐらい前から、あちこちの郵趣会に顔を出して参加をお願いして回った。天野先生には「伊藤君が実行委員長なら」という

### 外信往復葉書/関東庁発行



DAIREN 1928. 2. 3

ことで、手数料10パーセントでチャリティオークションの出品をしていただけることになり、2018年8月4日山口県長沢ガーデンで行われた防府切手のつどいの前夜祭で最終打ち合わせ。翌日の昼食はゆめタウンのフードコートでいっしょに。

全国郵趣大会時も、前日に諫早まで迎えに行きまずと連絡したが、最初は島原鉄道で自分で行くとのことだったが、結局お願いされて迎えに行くことになった。昼食は島原城の前にある姫松屋の具雑煮。天野先生の島原での注文は「旨いコーヒーを飲みたい」ということで、探したが、時間的に一番旨いと評判の店は開店していず、2番目に旨いと言われる「青い理髪館モモ」に行った。ここのママは私の教え子で、美人と評判の店だがコーヒーでも有名だった。子供は愚息と同学年というのも初めて知った。

さて郵趣大会パーティ席上のオークションでも天野コレクションの売り立てが40万円以上、売れ残りは1割引きで即売。全て終了後の残品を私が引き受け、私の不用品はヤフオクで売ったりして、すべて現金で天野先生に渡せた。オークションでは天野先生宛のコイル切手のカバー等魅力的なものが多かったが私は実行委員長という立場上、手は上げずに、売れ残りの中から何点か自分のコレクションに加えた。その中の一つ（前ページ画像）もこの不落礼品で今はコレクションに収まっている。

### 【逝去に関して思うこと】

92歳というお歳だとは全く意識していなかった。今回初めてそのことに直面した。ということは先生が1932年の生まれで、1931年生まれの私の母とは1歳下か同学年。昭和2年3月生まれの父とは4・5歳下。そんな歳とは全く意識してこなかった。母が亡くなって10年以上、父が亡くなっても

うすぐ30年。母は旧制高等女学校卒、新制長崎大学1期生なので学制改革のはざま。天野先生はその頃の人とはとても思えない若さだった。

### 「切手収集は狩りだ」

天野語録でも有名な言葉。私も実践してきたが「伊藤君が通った後にはぺんぺん草も生えていない」とは今となっては懐かしい。

### 「天野学校」

郵趣界には日本切手をはじめ多くの会や集団・グループがあるが、中には「利だけ」で結びついているグループがあり、往々にして排他的であるが、天野先生を中心として集団は「信」によって結びついているのではないかと。徒党を組むというより、天野先生と1対1で向かい合う緩やかな結びつきのように思う。

### キーワード

地方と日本切手伝統郵趣。この2点が天野先生のキーワード。今回『天野コレクション 上・下』を引っ張り出してみたところ、本にサインをもらっていた（左下図）。この中の何点かは私のコレクションに入っている。

### 最後の会話

JAPEX2022は先生の来場はなく、その前の年LAPEX2021の会場でのこと。私が耳が遠くなったことを話したら、自分もそうだ、そして私は実は耳鳴りに悩まされていると話したら、天野先生の同じだということ話を話したのが最後の会話。

今でも喪失感は大いだが、思い出の中の天野先生のあのニヤリとした話し口や笑顔はいつまでも忘れることなく頭の中に残っていくだろう。これまで、私の人生の目的は80歳「昭和切手発行100周年」の2037年まで生きるということだったが、これ

からは天野先生の92歳の歳を目指して行こうと決意した。原爆被爆者の父は69歳で亡くなったが、母は81歳、祖父は85歳まで生きたので達成不可能ではないはず。

長々と駄文を連ねたがご容赦願いたい。天野先生のご冥福を祈ります。合掌。

